

「人として生きる」

宮城県 仙台市立第一中学校 3年

佐藤 萌（さとう もゆる）

戦後七十年の節目となった今年の夏は、観測史上初の猛暑を記録して、全国の人々は暑さで苦しめられた。七十年前の夏はどうだったのだろうか。終戦を迎えた夏は、暑さだけではなく、深い悲しみが人々の心身を苦しめたことだろう。戦争という悲劇から、基本的人権について考えてみようと思う。

同居している八十九歳の祖母は、夏になると悲しい記憶を語り出す。進行性の認知症を患っていて、新しい記憶はほとんど忘れてしまうが、七十年以上も前の出来事を、詳しく淡々と語るのだ。話の一つ一つが悲しく、重く伝わって来る。そして悲しみと恐怖心が、私の中で年々大きくなっているのを感じる。

祖母が生まれたのは、中国の満州、撫順という場所で、曾祖父は満州鉄道に勤務して、外国人の労働者を受け入れ、派遣する部署の役職に就いていた。家族は役職者用の社宅に住み、生活環境の整った恵まれた暮らしをしていた様だ。曾祖父は仕事でも中国やロシアなどの外国人と関わり、自宅にも身の周りの世話をする外国人を数名雇っていた。当時満州鉄道で働いていた外国人の多くは、生活のために過酷な労働を強いられ、生活の格差は子供の目でも分かるほどだった。そんな暮らしの中で、穏やかで誠実だった曾祖父は、地位や国籍に関わらず、たくさん有る物資や食糧は、できるだけ分け合う努力をしていた。家に入出入りしていた外国人とその家族達にも、食糧や衣類、時には薬なども手配し、生活が向上するように、日々心がけていたそうだ。誰に対しても平等に接して、平等に生きるチャンスを与えようと努力した父親が、祖母はとても誇らしかったという。そして曾祖父のこの生き方が、終戦の時、祖母の大家族を救うことに繋がったのだ。

終戦を迎え、曾祖父が役職に就いていたため、祖母達家族は引き揚げまでにかなりの時間が経過していた。満州を出るまでの日々は、死を覚悟するほど悲惨な状況で、今でも祖母は全てを話す心境にならない。今まで共に生き暮らした中国やロシアの人々が、敵国の人となって、家族を苦しめていた。略奪や拉致、殺人、非道な事を目の当たりにして、戦争がこんなにも人々を変えてしまうのかと、悲しみや恐怖を超えた複雑な感情になっていたという。しかしその悲惨な状況の中、祖母の家族を救ってくれたのは、長年家で雇っていた中国人の人達だった。食糧を集めてくれたり、危険な生活を陰ながらサポートして、日本に戻れる様に支えてくれた。彼らにとっても命がけの手助けで、最後は、引き揚げ船までの長い道のりを、一人も欠けることなく移動する手配をして、船に乗せてくれたのだ。曾

祖父の生き方が、人の心を動かし、人として大切な心を育てていたのだと感じる。もし曾祖父が、日頃から差別的で有ったり、私腹だけを肥やしていたら、支え、助けてくれる人も無く、今の私も存在しなかつただろう。

ここから、大戦中に起きた様々な人権侵害から、基本的人権の尊重がどれほど大切な権利なのか、祖母は身をもって知っているのだ。そして祖母の話を書く度に、曾祖父の生き方の様に、地位や国籍に関係無く、どんな状況でも守るべきこと、それが人権の尊重ではないだろうかと私にも理解できる。自分が人間らしく生きるためにも、まず身近な人々もそうで有る様に、日々の暮らしの中でも心がけて生きていくことが大切だと思う。戦争という悲劇からは、何も生まれない。しかし、祖母の体験談から、私は自然にたくさんの事を学んでいたと気付かされた。そして、辛い思いをした祖母の事を、私が支えて守ってあげなければという気持ちが一層強くなった。

七十年前十九歳だった祖母には、明るく楽しい青春時代は無かつた。その代わり、たくましく、辛抱強く生きる力を身につけた。そして曾祖父の様に、自分に関わる人達に礼儀正しく、平等に接して、できるだけ多くの人達が、人間らしく、自分らしく生きて行ける様に努力して来た。今現在は病気も進行してしまい、昔の様なたくましさや強さは失くなってしまった。昼夜が逆転して、不思議な行動をしてしまったり、同じ話を何十回も繰り返したり、知らない人が見れば、壊れてしまった老人にしか見えないと思う。私もはじめは慣れなくて、どう対応すればいいのか戸惑い、見て見ぬふりをした事も有った。しかし、二十四時間介護している母の姿を見ているうちに、どう接したら良いのか、自分に出来る事は何か分かってきた。どんどん壊れていく祖母の人格や要望を受け止めてあげる事、そして最後まで人として尊重してあげる事が、家族の義務だと気付いた。一つ一つ失われていく祖母の記憶から、少しでも悲しみが減る様に願いながら、今日も同じ話に明るく返事をしてあげよう。今日も優しい気持ちで、手を引いてあげよう。そして祖母の記憶に、私の笑顔をたくさん残してあげたいと思う。